柳本集

左一

和書門
類 号 二五五七四 函 六八 架 三六 冊

内閣文庫
和書 類 二五五七四號 二六冊 二〇一函 一五架

内閣文庫	
番號	和 25574
冊數	36 (1)
函號	201 433

201-433

国立公文書館
National Archives of Japan

柿本集上

いはみの國にてわかるゝ人に

拾遺 石見なる高間の山の木の間より我ふる袖を妹見らんかも

秋山に散る紅葉ゝしはしくもちりな乱れそ妹かあたり見ん

拾遺 岩代の野中にたてるむすひ松心もとけすむかし思へは

[illegible]

拾遺 三熊野の浦の濱ゆふもゝへなる心は思へとたゝにあはぬかも

新古今 神風の伊勢の濱荻折ふせて旅ねやすらんあらき濱へに

同 夏野行をしかの角のつかのまも忘れす思へ妹か心を

拾遺 朝ね髪我はけつらしうつくしき人の手枕ふれてしものを

新勅撰 [illegible]

[illegible]

拾遺 [illegible]

あしひきの山より出る月まつと人にはいひて君をこそまて

新勅撰 玉たれの小簾の間とほしひとりゐて見るしるしなき夕月夜かも

拾遺 とにかくに物は思はし飛騨たくみうつすみ縄のたゝ一筋に

新古今 足引の山田守をきなかをくかひの下こかれつゝ我恋をらん

拾遺 杉板もてふけるいたまのあはさらはいかにせんとか我ねそめけん

同 難波人葦火焼屋はすゝたれとをのかつまこそ常めつらなれ

[illegible]

拾遺 天雲の八重雲隠鳴神の音にのみやはきゝわたるへき

[illegible]

拾遺 [illegible]

[illegible]宇治川の[illegible]

…學文…
和學講談所

新古今
民すミの千うち川のおとろ木にいさゝ小波の行迎さへけし

拾遺
我せこをこちこせ山と人はいへと君もきまさぬ山の名ならし
川と

まかねふくきひの中山
大君のかくれの山を帯にせる細谷川の音のさやけさ
つき草に衣そめてしる君かいろとおもふにもすゝしと見て
なつかしみ我おもふ草に事よせておもふ心をかけまつ

拾遺
山高み夕日かくれぬ浅茅原後見んためにしめゆはましを

同
水鳥の玉江の芦をしめしよりをのかとそ思ふいまたからねと

同
月草に衣はすらん朝露にぬれての後はうつろひぬとも
我心ゆたのたゆたにうきぬなはへにもおきにもよりかつましを

拾遺
久堅の雨にはきぬをあやしくも我衣手のひる時なきか
ゆふ掛て祈る宮の神さひていはふにはあらす人めおほみこそ

りつてうひ千代の鳴声をとゝく舟にのかすしんこえのかはにて

拾遺
てらしはる里に住けれはなくこゑすく物を
川の瀬のはやくもあれはいつもみゆるかは舟かも

同
芳野山にあそふする時の
みれとあかぬ芳野の河のとこなめのたゆる時なく又かへりみむ

拾遺
伊勢の國に行幸する時に京にとゝまれる
生乃海に舟のりすらんをとめらかたまものすそに塩満らんか
志ほさゐにいらこの嶋へこく舟に妹のるらんかあらき濱へを
わきもこをいさみの山をたかみかも大和のみえぬ國とほみかも
石見國よりめしのほるときその妻にわかるゝ

新古今
篠乃葉はみやまもさやにみたるとも我は妹思ふ別きぬれは
鴻乃こゑのあはれしらるゝよ

久安にをやまにては こそやのみなにをおもはれ
あきの日にはくさとしいまのまゝの月のくらきかな
式人のいつく
鴫のゐるやまのゐの池のみなみの鳥もゆふさりて人なきは
うきものをよなよなかへのやまひとゆくかはるる
あやなの袖のうへにてなんやこれのちのすゝきをすゝくはあかりや
一云とりよすゝるとてあるはいなく
うきをののまゝにせたゝそはれのちるを
あすかの川の女おもむる時よそめる

拾
飛鳥川しからみわたしせかませはなかるゝ水ものとにかあらまし
いとはいなく思へやとさらへんとおもひん
まへ大君のことをますまとり一云よきなりますまよこと

立ちかへりいこことさかへのみよかすゝおもかなるの時雨

新古
久安にわかれなきを白いの君に月日すもれしく恋しき人
あさ乃やまかちれ流るれなれのゆくゑかたき思ひ
先のしらそのちよろせんる
あさやまのは葉をとまるきもみの嵐をも山をすゝく
さすさみひくちらもさかるとをすきちやきゆふなる
さゝにはもえいさくみちさすらと
紅葉の色はぬの秋をしのきさのつらしとのみはてはのをしき
又いなく

拾遺
去年みてし秋の月夜はてらせともあひみし妹はいやとほさかる

拾遺
家にいきて我屋をみれは玉床のほかにむきけり妹かこまくら
いきろ乃うきの身なくなるときいかゝせんる

あふみのくにのひらに あつまりてまかりけるに

あふミの宮のあれたるをみて

さゝなみや志かのからさきさきあれと大宮人の舟まちかねつ

新古今

天さかるひなのなかちを漕くれは明石の門より大和嶋見ゆ

むこの海、海ならしあらしいさりするあまのつり舟浪の上に見ゆ

すみの江の浦に舟のりすらし女子のあかものすそに塩みつらんか

大舟にまかちしゝぬきこきいなはおきさかしらや漕そのまつ月はやみ

あふみの宮のあれたるをみて

拾遺

さゝ浪やあふみの宮は名のみして霞たなひき宮木守なし

さねさしのみ井のこゝろまて見のうへまてさまよひく

ひとゝなりて

はるしものわかれはてゝたえましきみか山のとこにあらすよひまさる

拾遺

石見國にてなくなりぬへき時よめる

前ノ舞 詞書せ

沖津なみよらん荒磯をしきたへのまくらとまきてぬる君かも

拾遺

いしの山のいはねにまける我をしもしらすて妹か待つゝあらん

かみ山のいはねのもとにある我をしてやいりまちつゝあらん

山のはしたえともしらて白雲の枝にかゝれる雪のかた

柿本集下

拾遺
人ことハ夏野ゝ草のしけくとも妹と我としたつさはりなハ
山里ハ月日もしらすくらすらん心のとかに葉をハたのまん
これ乃ことしれ志らん葛野の草の刈ならハしをとらしつゝ
かさゝきのわたせる橋の音せぬをいつとかまたんとたのむ

拾遺
杜鵑かよふかきねの卯の花のうき事あれや君かきまさぬ
まれにきてハ我宿の花橘ハちりにけりなとかきまさぬ
つねそとて撫子の花をつみしより朝なくらん
新古今
よそにのみ見てやゝみなん紅の末摘花の色に出すとも
夏草の露わけ衣きもせぬになと我袖のかはく時なき
月の出るをまちて照月もしらす袖ひちや妹にあはれ
逢事ハかたみの衣をかへしつゝあはれとそ思ふ

拾遺
天川こそのわたりのうつろへハあさせふむまに夜そふけにける
としのひとよ夜をつくしておもはんハ我恋せん
あはてハまつ天乃川風
彦星と七夕とこよひあふ天乃川流たなゆめ
志らくもおもひ天川舟むかへ

拾遺
秋風の天の川舟
天川霧立渡り彦星の梶の音きこゆ夜の更行は
こよひなきつゝおもはす君か舟出ハ年にこそまて

拾遺
天川とをきわたりにハあらねとも君か舟出ハ年にこそまて
あまの川霧立七夕の天の羽衣

拾遺
渡守舟はやわたせ一とせにふたゝひきます君ならなくに
天乃川瀬々やさしも鵲の羽玉のよハ更行とあかぬ彦星

天川霧たちわたるひこほしのつまむかへ舟年のわたりにたゝ一よのこと
七夕のこしかたゆくへたなはたの年をまちけん
秋風のふきにし日より天乃川せゝに立出てまつと告こそ
天川こそのわたりのうつろへはあさせふむまに夜そふけにける
天の河浅瀬白浪たとりつゝわたりはてねはあけそしにける
彦星の妻まつ舟の綱手縄たえんと君か思はなくに
ひさかたの天乃川原に年をまつ
白露のおかまくおしみ秋萩のおりてのみやはおきやからさん
秋乃田のかりほの宿のにほふまて咲る秋萩見れとあかぬかも
萩乃朝露をきて清と人はいふとも
秋されは露をおもみ秋萩のしたはもみちぬ
人みなは萩を秋といふいなわれは尾花かすゑを秋とはいはん

玉かつらたえぬ心のよをへても秋萩の花咲にけるかな
我宿に咲る秋萩常ならは我まつ人に見せましものを
我宿に植てこそ見め秋萩を誰かしめゆふ我にしらせす
手にとれは袖さへにほふ女郎花この下露にちらまくもおし
ますらをのよひたてしかはさをしかのむねわけゆかん秋萩の花咲

拾遺 赤人
こひしくはかたみにせんと我やとにうへし秋萩花咲にけり
秋萩はかりにはあはしといへはかも声をきゝては花にちりなん
秋されはかりのまかなんと植し萩か霜おきてちりなんことのくやしさ
秋風に山飛越る雁かねのいやとをさかり雲かくれつゝ

新古今
あさ霧の雲のしのゝめわかれ行霜にかれゆく
垣根なる萩の花咲秋風の吹なんときに人まつ宿に
山近く家ゐをせれはさをしかの声を聞つゝいねかてぬかも

足引乃山にのほりて聞かすして書くふ声とこそ過しけれ

拾遺
夕暮は日くらしの鳴くに日毎にまちこそあかせ君を待つ

秋風乃寒く吹なる我宿乃浅茅かもとに日くらしも鳴

陰草乃おひたる宿乃夕影に鳴日くらしの声をきくかな

拾遺
神なひの山下とよみ行川に蛙鳴なり秋といはむとや

拾遺
庭草にむら雨ふりて蜩乃鳴声きけハ秋ハ来にけり

草枕旅ねの床に夜もすからこゝろつくしの蟲の鳴なる

そよとやハむすほれつゝ白露に蛙鳴なり秋の中かも

秋ならて置白露ハ玉かとも見えつゝ乃みの玉の白露

新勅撰
白露と秋乃花とをこきませてわくことかたき我心かな

我やとの尾花か末に白露乃置し日よりそ秋風ハ吹

この比の秋風寒み萩の花ちらす白露置にけらしも

拾遺
この比乃暁露に我宿乃萩の下葉ハ色付にけり

新古今
雁の音ハ風にきほひて過れとも我まつ人の言つてもなし

新古今
秋されハ置白露に我宿の浅茅か上葉色付にけり

秋風乃日毎に吹ハ我宿の岡の萩の下葉ハ色付にけり

一年にふたゝひゆかぬ秋山を所もしらて過しつる哉

雁金乃鳴つるなへに唐衣竜田の山ハ色付にけり

新古今
夕されハ衣手寒し山の尾への早田ハかりもせて霜ハおきにき

我宿乃かとの門田のいなは秋ハ行て君かまつらん

こゑもしくさよ更ぬらし雁金乃鳴なる空に月立わたる

まつかせかつらの枝に置露のきよくかゝやく月かけそ見る

思ひ川時雨の雨ハ降ぬれと雲の上には清き月かけ

白露を玉につらぬく長月の有明の月ハ見れとあかぬかも

こひしくはかたみにせよとわかせこかうゑし秋萩
萩の花咲たる野への日くらしのなくなるなへに秋風そふく
秋山の木葉もいまたもみちねはけさふく風に霜もおきぬへし
秋田刈たひのいほりに時雨ふり我袖ぬれぬほす人なしに
玉たすきかけぬ時なくわかこふる時雨しふらはぬれつゝもいかん
もみち葉をちらす時雨のふるなへに夜さへそさむき独しぬれは
しなれまとしぬ我をまとひそ長月の時雨にぬれて君まちそ

拾遺
住吉の岸を田にほりまきし稲のかくかるまてにあはぬ君かも

同
秋乃田のかりほのやとのにほふまて白露乃おきぬれは

新古今
秋乃田のかりほのいほにしくれふり露にぬれつゝ君をこひつゝ
秋萩の咲ちる野への夕露にぬれつゝきませよはふけぬとも
おりてみはおちそしぬへき秋萩の枝もたわゝにおける玉露ハ

秋されはおくしら露にわか宿のあさちか上葉色つきにけり
さをしかの朝伏小野の草わかみかくれかねてや人にしらるゝ

新古今
我宿に咲る秋萩散かたに秋萩もおしむ身をやかへらん
秋されは雁飛こゆる龍田山たちてもゐても君をしそ思ふ
なかれくる君をとひこし秋萩のはつ花のちるをおしむか

新古今
雁金のはつ声きゝて咲出る宿の秋萩見にこわかせこ
さをしか乃入野のすゝき初尾花いつしかいもか手枕にせん
長月を君まつころのひつゝいかにいはてすむへき

拾遺
秋乃野のはつしらつゆに袖ぬれてしのふれはこそ

同
長月の有明の月のありつゝも君しきまさは我こひめやも
ちりぬへきいふ秋の木葉もいかにしてちらぬかな

拾遺
足引の山路もしらす白樫の枝にも葉にも雪のふれゝは

夜をさむみ明て出ぬれは庭しろく雪ふりにけり
淡雪はけさはきえぬれ白妙の袖にのみなかむ人はあらなく
うらやまし梅の花さへ久堅の清き月夜にいかてさかまし
梅乃花をりし咲枝を折ていとまなく袖をこそぬれ
まそ見ぬ人しおもはくに我宿の梅の初花ちらすもあらなん
淡雪の有ふりてしぬへくおもへはとけかたき
朝霞たちかくす雪乃きえてしなくしきみにあはむと我おもふ
新勅撰
我やとに咲たる梅を月よみによなよなみせん君をこそまて
拾遺
足引乃山下風はさむけれとこよひはまたや我ひとりねむ
古今
あはぬよのふる白雪とつもりなは我さへともにけぬへきものを
梅乃花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝは
同
まちやとれ池の汀にさく梅の花をしそ思ふいつかちるらん

拾遺
多枯乃浦ゆきて花とみるらん思ひそめしを
たこの浦の底さへにほふ藤浪をかさして行ん見ぬ人のため
子規鳴や五月のみしか夜も独しぬれはあかしかねつゝ
拾遺
年ありて一夜いもにあふ彦星も我にまさりて思ふらんやそ
拾遺
まれにきてあふともぬるゝてふ人の田を刈ておもひくるしくうらの浜
拾遺
我せこをまつとせしまに我宿の草さへ思ひうらかれにけり
同
秋風乃日毎にふけは我宿の岡乃木葉も色付にけり
見る人もなく流る山川のあはれ木の葉もまゝ流るらん
流るまてかそ
古今
竜田川紅葉ゝ流る神なひの三室の山に時雨ふるらし
新古今
わか宿の梅の白雪とちりかゝる我ゝ人より流ぬへきよ
足引乃山下とよみ行水の時そともなくこひ渡るかな

新古 志られぬるゆゑハ槙乃葉しのきおちくるひかりて
去郷乃ふる山にゐる雲のたちてもゐても君をこそ思へ
拾遺 水底に生る玉藻の打なひき心をよせてこふる此比
こゝろには出ていはゝゆゝしみ山川の瀧つ心をせきそかねつる
古今 風吹ハ波うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬへら也
拾遺 日のくれに雨ふる川のさゝら浪まなくも人のこひしかるかな
拾遺 たらち祢乃おやのかふこのまゆこもりいふせくもあるか妹にあはすて
同 おもひくて縁よりおもひしとおもふらんいかなる人の妹にあふらむや
同 恋するに志ぬる物にあらませハ我身ハちたひしにかへらまし
同 恋しなハ恋ても志ねとや我妹子か我宿の門を過て行らん
同 あら礒のほか行浪の外心我ハ思ハし恋ハしぬとも
須磨のうらに松のうらしくしも我ハあまの恋わたるかな

拾遺 佗ぬれハしゐてくるしつ霞こ川のおもひのまゝにいはぬらん
ちゝひにもしゐてわすれん玉の緒のたえなんとおもふいそ言ん
同 千早振神乃いかきも越ぬへし今ハ我身のおしけくもなし
同 山のはにさし入月のいさゝかにみえし人にそこひしきまてよ
拾遺 秋萩にをく露おもみわかまもひぬらんとはおもふ我妹子
同 こゝろのこ辰乃市とハさはかねとも今ハうらみもなし
同 きみか住立田の山の麓にハ世にもあらしの風も吹なん
同 皆人の笠にぬふてふ有間菅有ての後にあはんとそ思ふ
同 ますかゝみてにとりもちて朝な朝な見れとも君にあく時そなき
たまゆらまきしのゝめのわかれにハおきてかへらんあさなかな
拾遺 かくハかりこひしきものとしらませハよそにみるへくありけるものを
同 こひしともいはゝ玉鉾の道行人にことつてもせん

拾遺　足引乃山より出る月まつと人にハいひて君をこそまて

同　あひみてハ幾久さもあらねとも年月のことおもほゆるかな

拾遺　岩祢ふみ重なる山ハなけれとも逢ハぬ日かすを恋やわたらん

拾遺　ゐのなはらつこれよりかくて成ぬれハかくてと思ふそれゆへよりまさりける

拾遺　鳴神のしハしとよみて空くもり雨もふらなん君とまるへく

拾遺　烏羽玉のこよひハあけて明ゆかハ君を待らんも

同　足引の山鳥乃尾のしたりをのなかなかし夜をひとりかもねん

拾遺　ちはやふる神乃いはへる命をもたかためにかハ長くと思ハむ

拾遺　飛鳥川しからみ渡しせかませハ流るゝ水ものとけからまし

拾遺　白波ハたつと衣にかさならしあかしもすまもおのか浦々

同　あふみちのをやれハさしたる麻もいときのことくおもほゆる

古今　ほのほのとあかしの浦の朝霧に嶋かくれゆく舟をしそ思ふ

拾遺　鳴神乃音にのみきく巻向乃ひはらの山をけふみつるかな

同　いにしへに有けん人も我ことく三輪乃檜原にかさし折けん

同　しなてるや片岡山に飯にうへてふせる旅人あはれおやなし

さる澤乃池に身をなけける采女をあはれみて

拾遺　わきもこか祢くたれかみを猿澤乃池の玉もと見るそかなしき

拾遺　湊入の芦わけ小舟さハりおほみ我おもふ人にあハぬ比かな

拾遺　朝霜乃きえてみすみ思へともいそのつましもあるになるらん

拾遺　ある月乃さやけくしあかす雲かくれたかくそありさゝれ此

同　まちつまむふハ中れちかくうちわたす春のはるかに妹かあたりハ

拾遺　そらの海に雲乃波立月の舟星の林に漕かくるみゆ

同　ちまたに人ハいふともおそれさんへにはかて抽に白き鹿衣

劫ハむとり寿

拾遺
まそ鏡みかゝし思ふ妹にあはむかも玉の緒の絶たる恋のしけき此比

拾遺
夕されハ衣手寒し吾妹子かとき洗衣行てはやきん

同
おほなむちすくなみ神の作りけん妹背の山を見るそ嬉しき

同
巻向の山へ響て行水の水泡のことし世をハ我身は

我袖にあられたはしるまきかくしけたすてあらん妹かみるため

秋田かるかりほをつくりわかをれハ衣手寒し露そ置ける

新古今
矢田乃ゝに浅茅色付あらち山峯のあは雪寒くそあるらし

右の雪の寒けき消ぬへく思ひを…

柿本人丸あまりしるまゝに東ちへまかりけるを

もくぬれつもしと思ひこれらいさかりてもわかれて

えの下ふぬに三月さ命へ川あまりをまでいと去

長きみてちやくさゆんかてしまこゝみによはあらくに

乃心をよみける足ひきの山鳥の尾のしたりをの長々し

とそあるやむしと云所よりそあたりしりと飛む

幾内　五ケ國

やましろ

うちは今てあさ風寒しあさ乃宮やましろに君の里へあたる

左右を

あさひやまやましいむいはしへの井手乃山吹花の今かに

かつらき

わかおもふこの竜田山かくしみゆの松乃をかわ

いはつかん

難波かた海のかたをゆめみにはと思せてみなあかつき

津の国

新古今
あし鴨のさはく入江乃水ちかミて世にすミかたき我身なりけり

東海道十五ケ国

伊賀
ちかねとよひそのまつ森ハ孫春日乃霞のうちにそ見ゆ

伊勢
二葉よりしの極めたる人のおいまれ物よかりけむをハ

しま
山川のみなかミまけて行水ハみなそこきよくすみにけり

とをみ
春きて梅の花さく鶯のなくねをきけはうれしかりけむ

三かは
あさ人のつるかたなかのまつの木の下のやとりにしもそおく

とをたあふみ
いねのはなとなりけるあふ事ハ種蒔てけふくるおさハくれなりけん

するか
富士の根のたかねの足もとまるへしとふけ行まゝにみえもこそ成

いつ
あふ事といはれし人もうき鴻のうきにも人を恋渡る哉

かひ
すまの浦にはたれかくこれかの時の足の千代つむ物やいかに

さかみ
足柄のさかのむかしゆかしむかしなかめのやまのみやこに

むさし
志かへるをのみして霧の足のやまのうへはれて何をしめ給

あは

吉田のさとにふるくもれあはれなりしかれさきくもり

かづさ

しをりしはかなさにかくかなしすゑまつれのかなしき

しもふさ

猪しをちなさかはにの橋わたしつまゝしれとへ渡にの

ひたち

いはかしこ見しかなかきし霞立山寄よりしさらや

東山道八ケ国

あふみ

なれはあふみなとの水れもしにれにれあふ人よすゑはあさ絶にの

みの

まつの海の沖までうつ風やしかのいはくに波ささくらの

ひだ

さて行みちの山しをれれに我いく日さけぬにはなれん

しなの

あつなのいたゝすかたれぬれ衣きしまのえそ立渡され

かうづけ

音まてうらなきてゆくよゆうへ告よ山もの花の盛を

しもつけ

まてあるとへしをはなしと相坂のゆかはね鳥のゑまえそしれ

むつのくに

いはかなしはのつらきをみるかなし難波の浦もたのみとおなりよ

いては

リタやみはおもおかつつもりし秋のいそくや花ののこりけるらん

北陸道

わかさ

きくこそはわかさは氷も橋本の松も春く人を思ひぬるかな

ゑちせん

きのふ越行人を待つらんゑちせんともうちとまるかな

かゝ

ともかくもおなしく花と人をも思ひしかるへき

のと

さ霧はかすみたちぬる山の櫻花んけしとはおもひしらぬかな

ゑちう

なかのゑちうにはさおとふきかはそれと人はおもはし

ゑちこ

人まつさとはおやのしんしゆゑちこさん人まくておもひわかるゝ

さと

あつまちれりをつ里におもてあひさかをやかての衣といはん

山陰道

たんは　丹後國不見所何

きよにはしは氷をきにもしくそよし音なく

たちま

春霞たちほのとすてなかこのしかのの櫻なかれけれ

いなは

うくひすの声をすのいふちなきいまはうつしのとを忘ん

ほうき

山おろしにちりかふあられ天津空さへ雲の林やかくさん

いなば

ちらしけりいなばの磯のいそかれとかへりて時雨にける

はうき

草乃葉もまよひおもはぬ宿の月さへ雲もしくるゝ物をともなるさ

いつも

かくれなく出雲の朝かすみにいつとしもなく人をこひしき

山陽道

はりま

まちかねて誰かすまひの関守もおもはぬ人をとゝめぬる物かな

みまさか

一夜のみなれしみまさかの常よりもこえつる花の夜はのあさくや

ひせ

ときは山葉の松の年へてもひさしきなみのをとふかなりけり

たましひはゆくへしらす入相のかねつきはてゝいはねにたかきこゑ

ひこ

日もくれてまれに立とおもふ嶺の桜花あらしの音そきこゆなり

あき

藤のおくていはぬのかたもうるほひの風のさむけに我身のうへ
すなり

水の上のいさりかの磯のすくらの明のそらにほのかなり
たちの空を

海乃なかにしき波の人ても達して今まかつひたりしはかなし

南海道

きのくに

浅からぬ神代の青柳いとなかけてを吹く風はあはれやと

あはぢ

はるかなる浪まに思ひ渡るにはあはぢや雨の袖まさるらん

あは

こと葉のみあはとはかなく流れきてつれなきことよしらぬ人の心

さぬき

まれにだに飽かぬさかりの人めかる衣のかへしといふもさぬき衣

伊よ

ちぎりしや風まつ人の思ひはいよいよたかく空にまよへる

とさ

見わたしのとさの舟こそはあやしけれうきたけて風の吹てはかはよ

西海道

ちくせ

つかくこそちくせまつられしといひやらむしまよりまつ舟もおいつむく

ふせむ

人まちひきそめて間のつれなさのつらきかれぬるかなのそてそぬれける（りあおもてくるとの）

ひさ

まれにしも我をこそ人のしりもせめおもひもあへずまどふ心ぞ

ふせ

忘れ難きふるさとのしもぞはまつらるゝといつれのかさまつれてもとふらむ

姫こ

花よりもまつ見れ（てつよ）よむつれ待るにさそはれておもふ人の命ならし

むしの

あはれとひとりのみこそ思ひしか月を心につくしまつもなれは

おほすみ

我やとにおほすすきやとのいりかれは秋来てすすしくさはかりけん

さほま

春の花をくらくつゆんそそしらみに佐はつけ

ゆき

まさかうる雲井は道もあらはせていそかねやしはさらん

清しま

比川は氷しゆきては氷上は流りつこの葉は杉きりわらん

雖入撰集不見家集歌

夫木

椿ちりしのの小松雖せよの萬代の緑の種とをまゆん

もゆつしかて

拾遺

あゆふやの匂ひはよしのはしるも奈良の都によしこやらん

同

みよしのの草刈そむるまては刈れともなほも君かためにと人やせん

よしのの宮よたてまつる舟

同

ちはやふる　我おほきみのきこしめす　あめのしたに

草の葉も　さはにはあれと　山河の　きよきかうちと

みこころを　よしのくにの　花ちらふ　秋津の野へに

宮はしら　ふとしきませは　百しきの　おほ宮人は

舟なへて　朝河わたる　舟きほひ　夕河わたる

この河の　たゆることなく　この山の　いやたかしらし

拾遺　なきかけ(?)の　たけかしの宮は　[illegible]

同　千早振神もおもひのあれはこそ年へて富士の山ももゆらめ

同　奥山の岩垣沼のみこもりに恋や渡らん逢よしをなみ

同　年をへて思ひ〳〵てあひぬれは月日のみこそうれしかりけれ

久方の天照月も隠行何によそへて君を忍はん

月のあかゝりける夜人を待侍て

同　しかりとてやらはあはすは梅の花夜半の月影[illegible]

同　久しくもなりにけるかな今宵はなこそ君をまちわたるかな

同　夢をたによしのに飛見るあかぬ夜のあさき[illegible]

同　うかりける逢事は玉の緒のみあるは絶せぬ我恋ちん

同　住吉の岸をもむのくる濱潟君を[illegible]

同　我しかや雲の中にもあらなくに雨も涙も降まさりけり

拾遺　白露のおくらん小野の萩か花今やさかりに成ぬらん

同　夜を寒み衣かりかね鳴なへに萩の下葉は色付にけり

同　乙女子か袖ふる山のみつかきの久しき世より思ひそめてき

同　出ぬれは[illegible]播磨の里に鳥はあれとも君をこそまて

同　春日山雲井のかくれて遠けれと家は思はし君をこそ思へ

[illegible]のほとりにて[illegible]成て[illegible]よみ侍る

同　さゝ浪や志賀のてこらの海わたり河せのみちを[illegible]

[illegible]　鳴声をえやは忍はぬ時鳥初卯花のかけにかくれて

同　妹とされは鴈の羽風に霜降て寒き夜なかを[illegible]

同　あすかの河紅葉なかるゝ葛城の山の秋風吹そしくらし

同　石の上ふるの早田のほには出て心のうちに恋や渡らん

同　御猟するかりはの小野のならしはのなれはまさらて恋そまさる

新古
夜半よし山下風吹て寒き夜を君まち侘てや独りかもねん

国立公文書館
National Archives of Japan